

知ることの楽しみ

郷土史を散策して

木寺 敬

今年の元旦、私は筑波山に向う万博街道を、車を駆って、小貝川へ向った。コンクリートの白い水門に吸いこまれる青い水の流れと河床を見せた洗堰を見下ろす丘の上、伊奈神社という小さな祠の前に立っていた。小さな神殿の周りの木立は綺麗に下草が刈りとられ、半開きの扉の中には賽銭が散らばっていた。期待していた宮司さん達はおられなかったが、私は用意してきた手紙を封筒に入れ宮司様と宛名書きし、神殿の扉の内側に置いて帰路についた。

数日後、一冊の本が福岡県土地改良区理事長という方より送られてきた。本は『伊奈家の業績』という伊奈忠治の研究者として知られた海老原忠氏の自費出版の貴重な一冊であった。

伊奈家と私の出会い

私は春日部市に移り住んで二十数年になり、息子達にとってはこ

の土地が故郷である。この故郷には沢山の河が流れている、古利根川・庄内古川・古綾瀬川・元荒川等古とか元のついた川に囲まれていることかねがね興味を持っていた。ある時息子の中学の郷土史の小冊子を読み、それが私の伊奈家に対する出会いの始まりとなった。

今から四百年前、この武蔵の國の辺は利根川の乱流する沼沢地であった。江戸時代初期、伊奈氏という代官が親子孫三代に亘って、東京湾に沿っていた利根川を太平洋の銚子の方へつけ替える大土木工事をやってのけたのである。

当時一体そんな土木技術があったのか？ その資金は？、労働力はどうのように動員したのか？ と次々に湧いてくる疑問に、ともかくこの眼で確かめねばと、休日ごとに車を飛ばして東に西に見て回るたびに、その壮大な事業に一



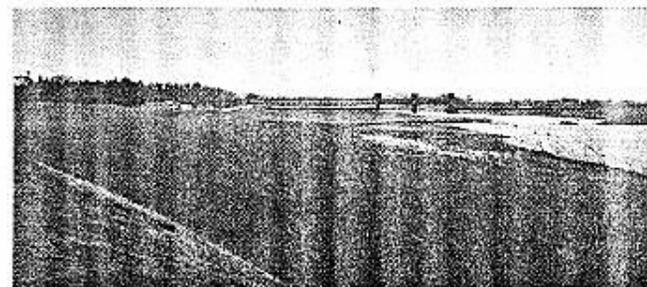
伊奈神社

体私の教わった日本の歴史は何故こんな大きな落し物をしてきたのかと驚きの一語であった。昨年大宮の書店で二冊の本を買求めた。
『関東郡代 伊奈氏』埼玉新聞社
『利根川』
著者は越谷市史編纂室の本間清利氏であった。一読した私は、直

ちに五万分の一の地図を十枚枚求め居室の壁一面に利根川・荒川を含む関東平野を掲示した。同時に日本の歴史の江戸時代の詳しいものを数冊、歴史年表、更に『埼玉県の歴史散歩』並びに関東各県のものを買求めた。歴史散歩シリーズは山川出版社の刊であった。休日は本と地図とサンドイッチを車に積み、見て回るのが楽しみになっていた。江戸初期の地名は殆んど現存していた。史料に出て来る場所寺社跡、墓石塔、石碑とその文面、有難いことに泉のふるさと散歩道標や史料室の解説文の看板が丁寧に要領よく我々に教えてくれるので、私はそれを書き写して歩いた。

伊奈家とは

伊奈家は徳川家康に関東入府以来仕えた初代伊奈忠次より、それ以後子代忠尊が関東郡代の職を免ぜられ所領没収の措置を受けるまで、徳川家直轄領を管理し、利根川東遷、荒川西遷、新川を開削し、堤を築き、百万石余の新田を拓き、開拓民には土地を与え種を与え貢税を免じ、飢民には米を与え、史上名高き農民一握の説得に当たり、中でも忠次、忠治、忠順の三人はその徳を称える後世の農民に神として小祠に祀られた。これら

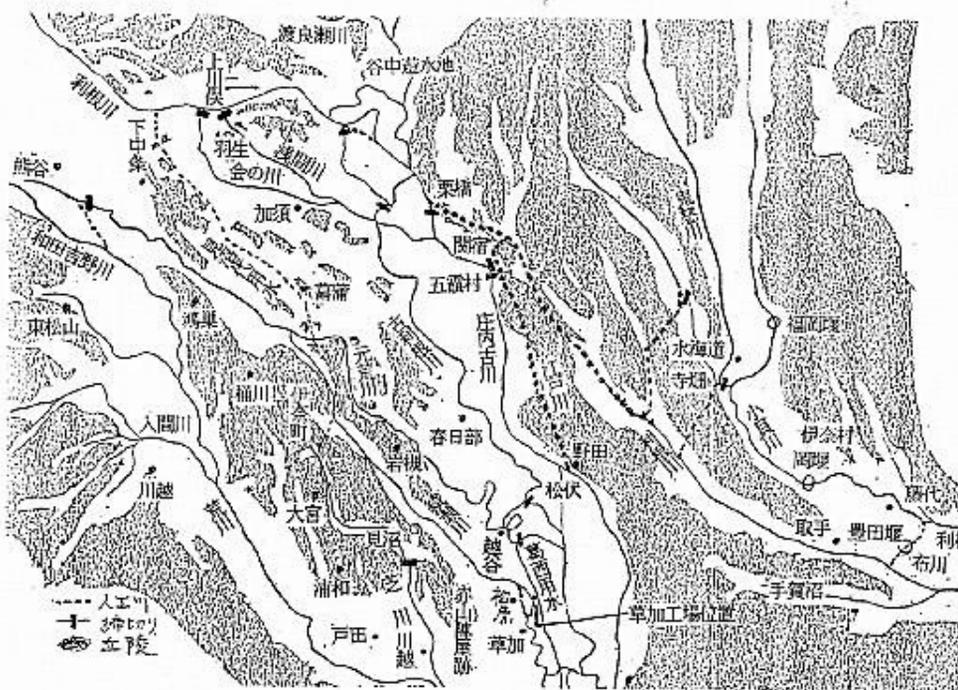


洗堰

の史実を知る人の意外に少ないのを不思議に思うのである。

初代 伊奈忠次

初代忠次は家康の近習(側近)であった。本能寺の変に当時堺の町にいた家康は三河へ逃げ帰るべく、伊賀越えを行ったとき、その才能を認められ近習に召抱えられた。忠次は武人というよりは行政官として家康の手足となつて働き、小田原の北条攻めの際には太閤秀吉に万石で召抱えたいといわせた程の手腕を發揮した。この間の逸話は赤山源長寺の五代目忠常



の建立した顕彰碑に記してある。

甲斐の忠次

また武田氏の滅亡後の甲斐の占領接収に行き、まず検地(後述)を行い、農地と貢税の高を調べ、農

民と接し彼等の信望厚い人物に、それが武田の遺臣であってもこれを用い、土地と身分を与え貢税を可らせた。

同時に土地と川を調べ、信玄の

治水の方法を笛吹や釜無川に学び、伊奈流といわれる治水工事のシステムを編み出し、後の関東の河川の治水工事に応用している。

関東の忠次

小田原改めは天正一八年夏でその年の秋、忠次は既に関東一円を視察している。その手回しの良さは、家康の近習として主従共に流石といはざるを得ない。家康の関東統治は準戦時体制の中での匡造りであった。家康は重臣達を関東周辺に封じ、江戸周辺の徳川直轄領は忠次に「己のもの如く大切に致すべし」と誓をたてさせて任かせた程の信頼ぶりであった。

忠次は武州小室に一万石の領地を貰い陣屋を開いた。が、この地は現新幹線の上越・東北両線が分岐する地であることが地図上で気がついた。伊奈可は忠次の徳を称えて名付けた町である。

治水と忠次

関東一円に現在残る治水工事跡の備前堤・備前堀・備前梁等は伊奈半左衛門備前守忠次の名を冠した忠次の業績である。それだけでなく行政上の関所の管理、伝馬制度の施行等郵送運輸から警察権に迄拡がる徳川幕府の基礎を作ることに参画して歴史上忠次の名が史

書に残されている。

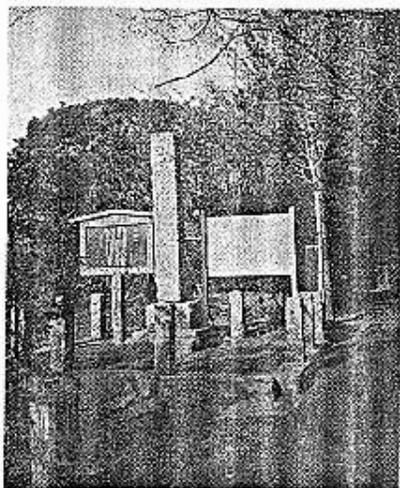
忠次の検地

備前検地という言葉も残っているが、これは忠次の検地である。検地とは農地を測量し、産高を推量し、貢税高を決める、統治の基を作る重要な仕事である。忠次は徳川の検地条令というシステムの基を作っている。江戸中期の数学者関孝和も徳川の検地役人であったが、測量の技術は伊奈家の家臣達にとっては治水土木工事も検地も同じ技術に基づく仕事であった。

草加と忠次

忠次と草加について記録が残っている。家康が草加を通られると、いうので、忠次は土地の郷士大川國書(大川家は今も草加に住んでいる)に命じて柳の枝や荳を敷きつめ、仮設道路を作った。家康は感心し「草や荳も使い方で役に立つものよ、この地をこの後『草加』と名付けよ」といわれたのが地名の起源とのことである。

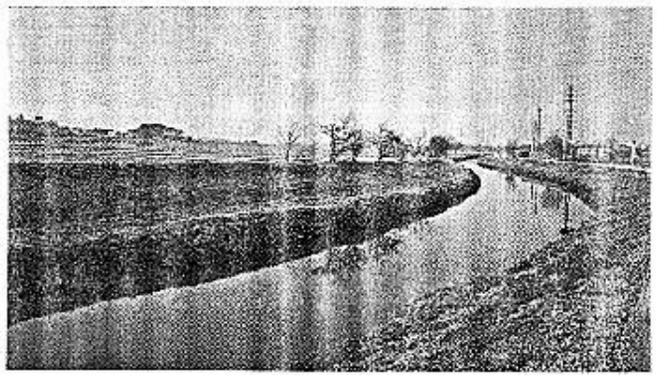
伊奈半十郎忠治



赤山城址

家康が秀忠に将軍職を譲ったとき、忠次は家康に、次男忠治は秀忠に仕えた。忠治は若いときから父に従って河川の工事に新田の開拓にと薰陶を受けた。忠次の死後その優秀な技術を持つ家臣団を引継ぎ、治水に開拓に大きな成果を挙げた。

荒川・綾瀬川の締切り
まず草加・越谷を流れる綾瀬川を荒川からの分流点で締切り、さらに荒川を熊谷の南方で締切り南へ新川を掘削し和田吉野川につなげた。かくして荒川・綾瀬川の流域の沼沢地は干上り開拓可能となった。たとえば、草加の近辺では機戸新田・七左新田等がその頃の開拓であり開拓者の会田七左衛門の代官屋敷は、今でも越谷浦和線道路の大門として残っている。



見沼と忠治

今開発論議で問題の見沼は、まず草加浦和線道路の八丁堤が見沼の溜池ダムで忠治の築いたものである。この用水を用いて下流の川口・赤羽へかけての新田が開かれた。見沼はその後八代將軍吉宗の時代に堤を切って干され、広大な溜池は見沼田圃になった。

吉宗が紀州から呼び寄せた治水家井沢為永に伊奈家臣団が協力し、はるか利根川より「見沼代用水」を開削し引水している。

忠次の失敗

見沼と芝川

忠治の治水工事は成功例ばかりではなかった、利根川の分流する会の川・浅間川とその下流域の開拓の為に次々と縮切り、蛇行するところに直流路を切り開き、次第に東へ東へと渡良瀬川との合流迄持ってきたのはよかつたが、洪水のたびに水は五霞村の低丘陵地帯を襲った。この辺は古代より開かれた歴史のあるところだが洪水の為すっかり荒廃してしまつた。

伊奈流の治水工事

元来伊奈流の治水工事は堤を築くのに幅広く強固に突き固められた低い堤で、増水時水を越流させてさらに築堤した低地に導いて滞流させる。「水越」という地名の由来でもある。水が引くと堤ももとのままになり堤の決潰による押し出し水で人馬の死亡するようなことは少なかった。

宝珠花に行つたとき立ち寄つた寺に三寺の同宗の本尊が合祀されていたことや、村の社が九尺程盛土した上に祀られている等も当時の洪水騒ぎの証しとして興味深かつた。勿論忠治は北へ東へ滞流の為の沼地を求め導水路を作つたが効果はなかつた。

江戸川の開削

当時の宝珠花の代官小島庄右衛門は関宿から野田に至る新川の開削を忠治に提案した。これが大変な難工事と見た忠治は、將軍家光の賛同を得て、資金を引出した。数年の工期を経て二〇キロに及ぶ現在の江戸川が開削されたのである。庄右衛門は忠次の同郷の友人で、伊奈家で働いていた代官であつた。宝珠花の小流寺に墓があり「小流寺縁起」の中でその功績は後世に伝えられた。

谷原七万石

忠治には大工事の業績がまだある。それは冒頭に書いた小貝川下流の谷原七万石の開拓である。小貝川は水海道市の寺畑で鬼怒川に合流していたが、忠治は寺畑から南に丘陵を切り開いて七キロの新川を開削し鬼怒川の水を岡を越えた南の宮陸川(後の利根川)に落した。小貝川の水は鬼怒の河床を通じて伊奈村を通り、利根町を南へ小文開の丘を切り削って布佐で再び鬼怒川に合流する。その間、山田堰、岡堰、豊田堰の三堰で水を灌漑に利用し、筑波山を仰ぐ広々とした原野が拓かれた。

忠治は伊奈村に陣屋を設け開拓を指揮した、農民や浪人武士を問

わず優れた人材を見出し、土地を与え種子を与え開墾を奨励した。伊奈村の教育委員会で戴いた資料によれば、寺畑の縮切りは難行を極め、二人の乙女が人柱に立つたという記録が残っていると云う。痛ましいことである。

山田堰は後に今の福岡堰に改められた。当時の堰は両岸から竹と土と杭で突き固めながら中央へ進み、流れを止める訳だが、春に築き、秋崩し毎年繰り返すことになつている。しかしその時々々の洪水、日照りの水不足等により、堰の上流下流の住民の利害が相反し堰を切る切らないで血の雨が降る水騒動がたびたび起きた記録が利根川町史に克明に記されている。

玉川上水と忠治

忠治の晩年江戸の町の庄右衛門・清右衛門兄弟が多摩川の羽村より江戸まで上水道を引く願書を幕府に出した。この兄弟より三代目の子孫が書いた『上水記』によると、幕府より六千両の金が出、忽ち使い果し兄弟がさらに三千両を



通船堰

追加し完成した。兄弟は玉川の姓を賜わり管理権を任された、とあるが、その後発見された幕府の許可書には、勅定奉行の名に並んで伊奈半十郎忠治の名がある。さらに検分役の派遣の通知書に忠治の手代のいうとおりにするようになるとの文書が発見され、玉川上水の建設に伊奈家が関係していることは明白になった。

しかし、忠治は工事許可の数カ月後病没、息子の忠克が家臣団と関東郡代を継いでこの工事を完成した。

伊奈忠克利根川を太平洋に

忠克は利根川の関宿から鬼怒川合流点までの忠治の掘った赤堀川を掘り下げ掘り抜け、遂に利根の水が分水嶺を越え銚子へ流れた。ここに江戸と銚子、さらに高崎を結ぶ舟運による大量輸送動脈が出来上つたのである。舟運に使わ

れた高瀬舟は米二百俵から四百俵が積まれた。もし牛馬で運ぶならば百匹から二百匹と同数の馬子を要することから考えると、この動脈が当時の政治経済に及ぼした影響は明治の鉄道、現代の高速度道路の開通と同じであつたらう。

高瀬用水と忠克

忠克は先に触れた見沼代用水より古い、もう一本の大用水路の真西用水を完成させている。即ち草加工場の脇を通る用水であるが、古利根川を利用し元荒川を合わせ、現越谷市役所の前に広がる瓦曾根溜井の堰より取水されて、草加・八潮の用水となった。



陣本門

忠治の締切りで溜いた下流域に何方所も溜井ダムを築いて水量の調整をし、水田用水として完成をした。久喜の琵琶溜井・松伏溜井・瓦曾根溜井とこれらは忠克の工事のようである。これら用水の為の木の伏樋、越樋と木製の樋管は相当大型のものが使われ、角型管、縦抜き丸管とともに、最近の土木工事の採掘時に掘り出されることがある。

伊奈忠順と富士の噴火

忠克より三代目、忠順の宝永四年富士山の大噴火があり、宝永山が東麓に出現した。降灰は関東一円に降り、駿河東部五九カ村は灰に埋まり潰滅してしまつた。領主小田原藩主大久保家は救済を願ひ出る農民に御救米二万俵を出すのが精一杯で、被災地を幕府に返上願ひ出る仕末であつた。

幕府も仕方なくこの地を関東郡代職の伊奈忠順の支配下に置いた。將軍は綱吉、幕閣は側用人柳沢吉保、それに忠順の上可になる勘定奉行萩原重秀で牛耳られていた。暗君に悪老中と史上に悪名

は高いが、先祖代々関東の農政の実権を握る忠順であれば、二人にとって必要な家臣であつた。被害の実状を調査し対策を建て献策するも、最初に出た幕府の方針は「棄民」であつた。即ち農民の浪人であり、「この地に住むのは無理であるから、どこか他所へ行って生計を立てる」ということである。しかし砂に埋まっても家はあり、行くあてのない難民達は坐して飢を待つばかりであつた。

忠順は幕閣を動かし、全国の知行取りに百石当り二両の賦課金を徴取させ復興資金を作り、農民を励まし砂除作業を行わせた。一方砂で河床が上がる酒匂川の堤の嵩上げ工事で稼がせたりしたが、食糧の尽きた農民を前に、忠順は意を決し、独断で駿府の幕府の米倉を開き、農民に分配してしまつた。綱吉の代は終り、政權交替になり儒者新井白石の時代となり、駿府の米倉の責を負つた忠順は、関東郡代の職を免ぜられ江戸へ召喚された。

富士の石碑

富士の須走にある伊奈神社の石碑に徳富猪一郎の頭影文があり、その一節に「逐ニ其役ヲ免セラレ、忠順江戸ニ帰ル、途中箱根山

ニ足ヲ止メ遙カニ御厨ヲ願ミテ曰ク、噫予ハ誰ヲ獲タリ、而シ岳麓五十九村ノ生靈、其ノ父祖墳墓之地ニ安ソズラ得ン、聞ク者感泣セザル無シ……」忠順の意志を新井白石は継がざるを得ず、さらに吉宗もまたこれを引継ぎ、実に三五年間、男女老幼を問わず米麦の支給が行われ、遂に作物が出来る土地となり、元の領主に戻された。

新田次郎の小説

作家の新田次郎は気象庁時代、富士山の観測に参加していた山頂で、土地の強力からこの話を聞かされ感銘し、小説『怒る富士』を書いた。文春文庫に、上・下巻で出版されている。小説では、忠順は詳細な報告書を幕府に提出し、米倉解放の責は己一人にあるとして切腹したことになっている。萩原重秀が免職になったとき忠順は没し、二カ月後親類の忠告が養子として認可された公式記録が残っている。

伊奈家と一揆

伊奈家に対する関東の農民の信望は厚く、史上著名な上州高崎藩の織物騒動、中山道伝馬騒動、天明の江戸打ちこわし騒ぎ等、伊奈氏が説得に当らねば鎮める事は出来なかつた。天明の飢饉に於ける

江戸の米騒動では、伊奈忠尊は將軍直命による権限を与えられ、関東郡代役所は江戸市内の治安を確保すると共に、米の配給までも行った為、町奉行所の方は実質機能を一時停止した形になった。

伊奈家の没落

しかし忠尊の代で伊奈家は郡代職を解かれ、所領没収という御家断絶一歩前の処置を受けた。時は松平定信白河梁翁の寛政の治の最中であつた。それ以後幕府の公式記録より伊奈氏の字は消えてしまつた。忠治の聞いた赤山の陣屋は数百人の住居があつたにも関わらず現在は只の山林に過ぎず、県の建てた赤山陣屋跡の石塔と県史料室の詳細な看板が、林の中の昼尚暗い山道を、二〇〇米ほど歩いた山に立っている。

杉浦家文書

私の住む春日部市の隣町、松伏町の旧家杉浦家より発見された古文書で、伊奈家失脚の詳細な記録が明らかにされた。杉浦家文書として松伏町教育委員会より活字化されて発表された(友人の町議よりコピーを戴いたので、もし興味のある方があればコピーを差上げたい)。伊奈家の重臣杉浦氏の記録は随くまで家臣の立場で書かれ

